

オウム真理教対策住民協議会ニュース

鳥山地域
オウム真理教対策
住民協議会

第29回抗議デモ 突き上げる20061123



山口議長、保坂区長、甲斐会長（前列）

今年で29回となる抗議デモは、11月8日（土）に行われ、世田谷区長をはじめ、都・区議会議員そして町会・自治会を中心とした地域の人たち200人近くが、鳥山区民センター前広場に集まりました。毎回応援に来てくれる足立入谷地域オウム真理教（アレフ）対策住民協議会の人たちも、一緒に「ひかりの輪」が居住するGSハイムまでデモ行進をしまし

た。特に今回は、団体規制法存続と觀察処分期間更新の期限切れが迫っており、シュプレヒコールを叫ぶ人たちの足どりにも力が入って、いつになく気合の入った力強い抗議デモになりました。沿道の人たちも驚きの目で見ていましたが、シュプレヒコールの内容を聞き、納得の表情で道を

あけてくれたのにはほっとするひとコマでした。自転車ですつと行進について来て、いろいろ質問して来た若いお母さんは、鳥山に越して来たばかりとの

事。そんな出会いを大切に、協議会ニュースで私たちの活動を発信して行く事の大切さを改めて感じました。住民協議会のオウム真理教（アレフ・ひかりの輪）への抗議活動も14年が経過し、良く頑張ってきたと感慨深いものがありました。先の見えないこの活動に終止符の打てる、解散・解体する日を目指して抗議デモ・学習会を続けて行きます。

尚、11月22日に行われた足立区入谷の抗議デモに鳥山地域住民協議会からも参加しました。

団体規制法存続・觀察処分期間更新を求める要請行動

オウム真理教に対する団体規制法が本年12月、觀察処分更新の見直し期限が来年1月に迫る中、当住民協議会は今年春から署名活動を続けてきたが、11月14日、集まった署名を携えて、法務大臣、公安調査庁長官に要請書と共に署名を手渡した。要請には当協議会から甲斐会長ら2名、世田

谷区からは保坂区長、山口議長、風間特別委員会委員長ら5名が参加をした。この度の要請行動には協議会関係では足立区、金沢市、滋賀県湖南市の4団体、オウム真理教が入る市町村で構成するオウム対策関係市町村連絡会も参加し、総勢29名であった。各団体からの発言の後、上川



法務大臣に要請書を手渡す甲斐会長

陽子法務大臣は「重く受け止めている。自分たちの生活がそこにあつたら大変だと思ふ。皆さんの思いに向き合つて、色々問題はあるかと思ふが手を緩めずに今まで通り共に闘つてゆきたい」と述べた。
また、ある住民協議会からアレフの現状について「現在の実質的なアレフの最高幹部は湖南市の二宮耕一で、度々上京している。彼の許可なしではアレフは動かない。麻原の家族のバックになつていて、色々な事件の糸を引いている」との報告があつた。

連載 オウム真理教と闘い続ける⑪ 元鳥山総合支所長 河合岳夫さんより

地下鉄サリン事件の恐怖の記憶は、おそらく私から一生消えることはないと思います。平成7年3月20日の朝、私は入院中の病院の8階の窓から顔を出して地下鉄築地駅の騒ぎを見ていました。緊急車両が何台もいて、人々が慌しく動いていました。そのうちに窓を閉めるようにとの伝達が出来て、緊迫感と同時に不安感が高まりました。結局、わずかな時間のズレで事なきを得ましたが、その日、見舞いに来る予定の母が気がかりだったのでした。
その後、私は平成16、17年に区民部長、平成20、21年に危機管理室長、平成22、23年には支所長となつて、住民や関係機関の方々とともにオウム問題の対策に深く関わることになりました。思い出すことが多い中でも、区民部長のときの印象が強かったです。

平成16年当時、鳥山の当該マンションは、敷地に貨車が雑然と置かれ、異様な雰囲気がありました。マンションの大家は、私も何度か会いましたが、意図的にオウムを入居させるだけあって、とにかく変わった人で、犬を連れて監視小屋の前を散歩がてら、住民の方々と言い争いをするなどしてました。1、2階にいる上祐ら信者たちは、異臭問題やゴミブリ問題を起こしてましたので、3階以上にお住まいの一般住民の方々の不安は大変なものでした。この不安は、無差別大量殺人行為を行ったオウム真理教が集団であるかぎり、地域にとどまらず国民全体が抱き続ける不安感です。解決には、オウム集団を解散・解体し、信者が個人々に立ち返るしかないと思ふます。
オウム対策住民協議会が、多様な意見をうまく調整して、14年間も運動を続けていることは、本当に賞嘆に値します。今後も、まちと青少年をオウムから守るため、協議会の活動にご支援をよろしくお願ひします。
最後に、私からバトンを受け、平成24、25年度に支所長としてオウム問題に尽力された山口浩三氏が7月末に逝去されました。氏のご冥福を心よりお祈りします。

オウム真理教最後の特別指名手配犯 高橋克也の裁判にあたり

オウム真理教元信徒平田信、菊池直子の二人が逮捕されてまもなく、最後の特別指名手配犯高橋克也が昨年6月に逮捕された。公証人役場事務長拉致殺害事件・地下鉄サリン事件の送迎役・VXガス襲撃事件実行役・東京都庁小包爆弾事件への関与を疑われていた。捕まることに怯えながらも、元教祖・死刑囚麻原彰晃の著書・写真・説法集やビデオテープを携帯し、麻原彰晃への忠誠心を支えに、人生の多くの時間を逃亡生活に費やした。高橋克也は1958年神奈川県に生まれ今年58歳、1987年にオウム真理教の前身オウム神仙の会に入信、柔道の有段者ということで麻原の警護役となる。オウム真理教は最も信徒が多い時で10000人以上を有していたが、高橋はスマンガラというホーリーネームを麻原から与えられ、組織の頂点である麻原を身近で警護することに誇りを持っていたのだろうか。そんな高橋が逮捕後も麻原への帰依を捨てきれず、今でも麻原を尊師と呼ぶ姿に哀れみを感じると共に、絶対的忠誠と共に恐怖心を植えつけ人間性を破壊、マインドコントロールで信徒を教団に都合の良い人間に追い込んだ、麻原の非道な手口に怒りを覚える。純粹な心を持つ将来のある青年を、麻原は自らの欲望と目的のために次々と犯罪に手を染めさせていった。すでに死刑が確定している12人と、無期懲役の5人の元信徒も麻原の手足として使われ、若くして人生の可能性を断たれたが、高橋も同様な人生を辿ることになるのか。

その高橋の裁判が来年1月には開始される予定だが、麻原の呪縛を解き放つことができない高橋の現状では、新たな事実の解明に過大な期待はできない。高橋に求めるものは、犯した事件が社会に与えた影響をどう受け止めるのか、オウム真理教の修行が自身に起こした変化、事件にどのような心境で関わったのかなど、すべての事件の詳細も含めて明らかにし、知り得る真実を忠実に語る事が求められる。さらに麻原彰晃とオウム真理教から決別することで、オウム真理教事件の被害者と向き合える第一歩となることを踏まえて、裁判に臨んでもらいたい。

ひかりの輪施設前で抗議文を読み上げる



抗議文

今年12月と来年1月、ほぼ同時期に団体規制法と観察処分が期限を迎える。烏山地域オウム真理教対策住民協議会は、過去6回にわたり団体規制法存続と観察処分期間更新を求める署名や要請活動を行ってきた。その度に世田谷区民をはじめ、各団体から署名が寄せられ、これまでオウム真理教の活動を規制する審査決定に貢献してきた。

今年7回目の署名活動は4月より始めた。地下鉄サリン事件から19年が経過したにもかかわらず、10月に署名を集計すると、44000筆以上の署名が寄せられていた。これは過去2番目に高い数字で、世田谷区民をはじめ多くの人々の関心は未だ高く、オウム真理教にNO（ノー）を突きつける上で重要な結果となった。

オウム真理教は、審査結果で幾度となく敗北したことを反省するどころか、益々団体の正当性を宣伝し、団体規制法・観察処分逃れを執拗に画策し続けている。特にひかりの輪にいたっては、団体の宗教活動そのものが観察処分逃れのアピールと言っても過言ではない。その活動内容は、松本サリン事件の被害者河野義行氏らを外部観察人に担ぎ上げ、ネット上では上祐が映画監督・評論家などと対談、ひかりの輪の正しさを主張し、オウム真理教事件の被害者には、賠償金の支払いをアライバイ的に継続するなど、ひかりの輪こそがまともで、危険のない宗教であると言ってはばからない。

上祐がどのような画策をしようと、住民協議会の目をごまかすことは出来ない。私たちは今回の団体規制法存続・観察処分期間更新を成功させ、オウム真理教の活動を規制すると共に、地域住民の安心・安全を勝ち取るまで活動を継続することを宣言する。

平成26年11月8日

烏山地域オウム真理教対策住民協議会
会長 甲斐円治郎

住民協議会活動報告

10月9日(木) 事務局会議
10月15日(水) 住民協議会
10月18日(土) 第23回自由広場で募金活動
10月26日(日) 第2回烏山地域蘆花まつりでPR活動
10月27日(月) 協議会ニュース140号初校正
11月1日(土) 第9回烏山コミュニティまつりで募金活動

11月2日(日) 上北沢区民センター文化祭で募金活動
11月4日(火) 協議会ニュース140号再校正
11月5日(水) 事務局会議
11月8日(土) 第29回抗議デモ
11月10日(月) 協議会ニュース140号発行

協議会ホームページアドレス <http://www.kyogikai.jp>

この協議会ニュースは、皆様の募金により発行されています。